

『教育研究』一九五一年八月（東京教育大学附属小学校）

教材の再検討

矢口 新

（一）

教材などという言葉を使うと近頃は珍らしがられたり、妙な顔をする人もいるようである。教育に於ける媒介物という意味であるから新教育に於ても尚充分意味をもっていると思うのであるがどういうわけであろうか。

凡そ教育或は人間形成が成り立つためには何等かの媒介物が必要であつて、そういうものがない学習などというものはあり得ない。むしろ如何なる媒介物を提出するかによって如何なる教育であるかも見分けるのである。新しい教育とか学習が、真に具体的にその新しさを生かすには、如何なる媒介物を提出するかを具体的に考えなければならぬ筈である。所が実際はそういう具体的な問題に目が向けられないで一般的抽象的な理論が横行しているのである。

教材という概念が新教育の叫ばれると同時に後退したのは、それが旧教育と結びついて余りにも具体的な形象をもっていたからだとも言えよう。即ちこれまで教科書が即教材だという風に考えられていた。そしてその教科書を教える教育が否定されると同時に、教材という概念も姿を消したのである。併したとえ教科書が姿を消しても、教科書

は教材の一種であつて教材そのものが新しい教育に姿を消していいというものではないのである。

所でよく考えてみると教科書が教材というのは少しおかしいのである。教科書そのものは教具にすぎない。教科書によって提出されている内容が教材なのである。教具と教材とは形式と内容との関係にあるのである。だから教科書そのものは一般には教具というべきであらう。国語の教科書でも、算数の教科書でもそれは中味が教材としての意味をもっているのであつて、即ち人間形成の媒介物としての機能を果たするのであつて、それを盛りこんである教科書そのものは教育に使われる道具にすぎない。

併しそういう教科書そのものも教材にならないわけではない。即ち場合によっては教材としての意味をもつて来ることもあるのである。例えば教科書はどういう形態をもった教具であるかということを学習するということがある場合には、人間がその教科書を教材としてそこに表現されている教科書の教具としての意味を分析することもあろう。そういう時は教科書そのものが教材として使われている時である。

併し一般的には教科書といえば、国語や社会科や理科の教科書であり、教材としての或る内容をもりこんだ教具として取扱われるのである。教科書はその意味で教材を提出している教具だというべきであらう。

教材は何も教科書のみによって提出されるものでない。様々な方式によつて提出されるのである。人間を形成する媒介物としての意味をもったものは、人間を如何に形成するかによつて様々に異つたものであり得るのである。その点が現在もつと真剣に考えられてよい筈であるのに考えられていないのである。何故なら新しい教育は新しい人間

の形成を目標としているのであるから、そのための媒介物即ち教材も新なものでなければならぬ筈なのである。即ち新たな方式によって提出されなければならぬ筈である。所がそういう所へ入って行かないで、教科書をするのと同時に——もちろん教科書を実際にすてたわけではなく観念的に軽視するくせがついたのである、——教材についての検討をする態度をも失ってしまったのである。

曾ての教育に於ける教科書の意味は絶大なものがあつたのである。それは多くの人がよく知る所であるが、それは何故かという教科書によって提出される内容が学習の目標であつたからである。少くともそういう考え方をしていた。話を具体化するためにここでは、理科や社会科の如き内容的な教科の教材を例にとろう。例えば理科の教科書によって提出されている内容は、覚えるための目標であつたのである。それは自然について先人が探求した結果が一つの概念としてまとめられて言葉として表現されている。生徒はそれを覚えることが学習だつたのである。知識を与える教育といわれるのはそれであるが、その場合に於ける教材とは、かくの如き記憶の対象としての意味をもつた概念であつたわけである。それは地理や歴史に於ても同様であつた。所で新しい教育に於てはどうであらうか。教材はそういう覚えるものとしての意味をもつたものではないのである。或る知識を記憶していつてそこに人間の形成が成立つとは考えていないのである。よく教材は現実的なものでなければならぬなどといわれるが、それは教材の意味が、現実の生活の内容としての意味をもつべきものということの表現であらう。

言いかえれば、我々がそれに対して或る働きかけをし、またそれを何等かの意味表現として受けとることによって我々の生活を進めて行く生活行動の意味対象としての性格をもつべきこと、その意味で現

実性をもつべきことを言つたものに外ならない。

このことは人間形成の目標が、覚えることから行動することにかわつていないことを意味する。行動するとはただ肉体を働かすことばかりを言うのではない。考えるということも入っている。受けとるのでなく働きかけるということであらう。

さてこのように考えると如何なる教材が提出されねばならぬであらうか。それは社会科や理科で言えば見て考える教材である。

社会科や理科は社会や自然について書かれた概念を覚えるということではないことは何人も知っている。判断することが大切であることもよく知る所である。そのためには、そういう教材が提出されねばならぬであらう。これも極めてあたりまえのことである。所がそういう教材を提出するような努力が具体的に真剣に行われたかということに問題があるのである。

考えるということは、我々の向っている対象から或る意味を引き出して来て、これを体系づけけるということである。生徒に考えさせるために、提出してやる教材は、生徒がそういう意味を抽出して整理することが出来るようなものでなければならぬのである。それは何を如何に考えてゆくかという学習の目標に沿つたものでなければならぬ。

所がそういう学習の目標にそつた教材が提出されていることは極めて稀であるようである。ここに教材問題を中心にして、現在の学習の現実を考え直す必要があるのである。

(二)

今社会科の新聞学習に例をとろう。新聞学習について、様々な考え方もあらうが、今若しこれが新聞社の組織や新聞のつくり方を覚えさせることとしたらこれは汎知主義の出来そこないだといえよう。も

ちろん結果としてそういうことも何ら知ることはあろうが、それは忘れてもよいことであって、大切なことは新聞についてその機能を考え、試みるということであろう。

それは我々の社会にあつては、我々の生活の発展に密接な関係があり、我々のこれに対する態度如何によつて、よくも悪くもなり、それが結局また我々の所にはねかえつて来るから、もはや我々の生活の一つの道具としてこれを守り育てることを考えなければならなくなつて来て居ることから当然な学習目標と言えよう。

さてこういう目標に対して如何なる教材を提出するかということが問題である。最近は大部少くなつたようであるけれども、例えば新聞社の見学をしたり、或はその組織をしらべ、その発行部数をしらべ、記事の種類を新聞によつてしらべるというような学習が多いようである。この場合に提出された教材が、眞の学習目標になつてゐるかどうかを検討してみると極めて心細い状態なのである。

社会に於ける新聞の働きというのは決して新聞社の中にあるのではなく、発行部数にあるのではなく、組織にあるのではない。その最も中心的な事実、目に見えない所に行われている人間の活動や心の中にあるのである。新聞社から様々な所へ出張して記事をとつてゐる記者の行動であり、それが様々な働く所であり、その人々の心の中にあり、記者と接触する人間との関係にあり、それが記者の原稿となつて新聞社に送られて来る過程にあり、それが記事となつて行く過程に於ける人々の行動にあり、その人々の頭の中や心の中の働きであり、更に新聞が発行されてからそれを読む人々の受けとり方やそれによつて影響された諸々の行動にあるのである。

そこには人間の様々な意味をもつた關係的行動が行われるが、それを新聞のはたらきという意味で統一して把握するときに一つのまと

まつた新聞の機能を考えることが出来るのである。こういうまとまつた教材が提出されなければ、新聞の働きは眞に具体的に考えられ得ないと言わなければならぬ。

こう考へて来ると社会学習に於ける新聞学習の教材を提出することは非常にむづかしいことがわかるであらう。それは非常に長い時間と広い空間に亘つて探られなければ捉え得ぬ所の現実なのである。

これこそまさに現実なのであつて、現実的な教材とは決して目に見えるものということでもなければ、意味をもたない物質的な対象を言うのでもない。

このような教材を必要とするならば、それには適切な教材提出の手段を考えなければならぬのである。旧教育ならば、話は簡単であるだらう。新聞の機能を概念として表現した教材を提出するであらうが、我々はこれを考える教材として、考えさせようとしてゐるのである。所がそういう現実にあつて考へようとしたら恐らく非常な時間と努力を必要とするであらう。実際にその現実にあつて考へるなどということは成立たないことであるに相異なる。そこに教材構成の問題がある。

今年から使用されはじめた教科書がこの種の教材を如何にして提出しているかを考察してみるとよい。それは従来の教科書に於ける概念的な記述ではなく、一つの筋書を追つた物語的色彩を帯びてゐるのである。リアルなものを表現しようとする一つの方式であると言つてよいであらう。併しそこにはもはや明らかな限界が見られるのである。そのような方式では、生徒に眞に現実を理解させ考へさせるだけの教材を豊富に提出することも出来なければ、現実性や心理性の点に大きな制約があるのである。

ここに新たな教材提出の方式を生み出さなければならぬ理由がある。

これは特に社会科や理科の如き、問題解決の学習を必要とする領域に於て望まれることである。それらの学習は自然や社会の現実に向迫ることであり、その現実とは時間性や空間性を克服して捉えなければ捉えられぬ現実であり、それを教材として提出するには、新たな方式を必要とする。現在の理科や社会科が教材問題についての検討が極めて浅く、ただ現実的な学習などという一般的抽象論を言っている限り、新教育の甘さは決して克服されないであろう。

様々の結構な目標を並べ立てた学習が結局は泰山鳴動して一匹の鼠も出て来ない観を呈するのはこの目標を達成するための具体的な媒介物に対して、極めて常識的というか、科学性がないというか、甚しきは何等目標と意味関連のない教材を取扱っているのである。そういう場合は結局に於て教師が目標としての概念を生徒に押しつける言葉の遊戯式学習が行われるのである。

これまでの新教育は結局に於て形式論を出でず、その内容に於て科学性と道徳性乃至実践性をかくことはもはや何人も認めざるを得ない事実である。単元学習といい、問題解決学習というも、その取扱っている内容は低い常識以上の何物でもなく、科学性論理性の欠如は目をおおわしむるものがある。そして結局は末梢的な事物にとらわれたトリビアリズムに陥っている。

この様な形式主義を救うためには、我々は教材の提出方式を具体的な問題を中心として一つ一つ考察してゆくことである。そういう教材の検討を通じて、その取扱いに於ける科学性や実践性をも新に発見することが出来よう。教材提出の新たな方式を具体的に考察することは現在の大きな課題でなければならぬ。

(筆者 中央教育研究所員)